朝日新聞
DIGITAL

旗ざお用の穴七つ、藤原宮跡から発見　律令国家、知る手がかり？

2016年9月29日05時00分

藤原宮跡でみつかった遺構の上に、３分の１の大きさで復元された幢幡＝筋野健太撮影

日本初の本格的な都とされる奈良県橿原（かしはら）市の藤原京（６９４～７１０年）の中枢部、藤原宮跡（特別史跡）で、天皇が出御する重要儀式などに使われる「幢幡（どうばん）」と呼ばれる旗ざおを立てたとみられる７基の柱の穴が見つかった。奈良文化財研究所（奈文研）が２８日発表した。幢幡の数などが奈良時代の正史「続日本紀（しょくにほんぎ）」に記された大宝（たいほう）元（７０１）年の元日朝賀の記述と合致し、飛鳥時代後半の律令国家形成期の歴史の一場面を具体的に復元できる手がかりとなりそうだ。

奈文研によると、天皇が執務をする大極殿院の南門の南約１１～２１メートルで出土。各穴の深さ約８０センチ～１メートル、柱の太さは直径約７０センチと推定され、大型の旗が立てられたとみられる。

続日本紀によると、文武（もんむ）天皇（６８３～７０７）が本格的な法律「大宝律令」の完成した大宝元年の正月に、官僚や朝鮮半島の新羅（しらぎ）の使節らを迎えた朝賀の儀式を開催。正門に３本足のカラス（烏〈う〉）、太陽と月、方角の守護神「四神（しじん）」（白虎〈びゃっこ〉、青竜〈せいりゅう〉、玄武〈げんぶ〉、朱雀〈すざく〉）の表現された計７本の旗が立てられたとされる。猪熊兼勝・京都橘大名誉教授（考古学）は「日本の国の始まりを告げる儀式の一場面を思い浮かべられる重要な遺構だ」と話す。（田中祐也）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.